



公爵邸の裏庭にある花蜜を畑薬と知らずに偶然口にして発情してしまったら、畑薬研究者のイケメン公爵令息様に求婚されて溺愛中出しセックスをすることになったのですが？

Mのうさぎ

## 【目次】

一話 公爵邸の裏庭で花蜜を偶然口にして発情してしまったら、媚薬研究者のイケメン公爵令息様に求婚されて溺愛中出しセックスをすることになったのですが？	…… 1
---	------

二話 二人のその後と幸せな日々	…… 75
-----------------	-------

あとがき	…… 117
------	--------

一話　公爵邸の裏庭で花蜜を偶然口にして発情してしまったら、媚薬研究者のイケメン公爵令息様に求婚されて溺愛中出しセックスをすることになったのですが!!

十八歳を迎えれば、令嬢令息たちは煌びやかで華やかな社交界に足を踏み入れる。パーティーで家の格や己の品格を示し、相手と想いが通じ合ったら、逢瀬を重ねた後、婚約を経て結婚へと至る……家同士が決めた婚約や紹介などの例外でなければ、これが王道の結婚ルートだ。

今宵も令息令嬢たちは理想のパートナーを求め、パーティーに集う。

本日の会場はリール王国の四大公爵家のうちの一つであるアウグスブルグ公爵邸。公爵家の中で最も温厚で慈愛に溢れていると言われるアウグスブルグ公爵家の当主は、パーティーで醜い奪い合いや殺伐とした雰囲気嫌う。そのためカジュアルでフレンドリーさが売りのパーティーとなっており、気兼ねなく食事を楽しみながら男女が話し合う場を設け、意気投合したカップルは締めめにダンスを

踊り、二人の關係の一步目を踏み出す。

今宵のパーティーは公爵家の三人の息子達が相手を見つける場ともなっており、長男と次男がパーティーに顔を出していた。容姿端麗で家柄も良い二人に多くの令嬢が殺到し細やかなアピール合戦が行われたが、二人の相手に選ばれたのは愛くるしい可憐な伯爵令嬢と公爵令嬢で、どうやら一目見て惚れ込んでしまったのだとか。

現在、公爵令息たちは会場の中心でダンスの主役を務めており、今宵に成立した美男美女のカップルも二組を囲むように踊っている。

煌々と光るシャンデリアに照らされ、光輝く彼らに令息令嬢たちが羨望の眼差しを向ける中、田舎の貧乏男爵令嬢であるマリーベル・カートレットもまた異質な輝きを放っていた。マリーベルは壁を華やかに彩る花……ではなく、雑草……でもなく、テーブルに用意された料理を美味しそうに一人で食べていた。

コーンポタージュスープに、王国の最高級の和牛を使った肉汁たっぷりのロー

ストビーフに、色鮮やかな海鮮ピラフ、ロブスターを使った熱々のアヒージョ、トマトクリームパスタ、グリルサーモンなどなど。さらに、新鮮でシャキシャキの野菜に熱々のチーズを絡め、家庭教師に訓練され身に着けたテーブルマナーを駆使して優雅に料理を口に運ぶ。

もちろん、デザートは別腹だ。

「……ほんと美味しい。はあ、しあわせえ……」

マリーベルは白を基調としたドレスを汚さないように熱々のチーズを纏った野菜を齧ると、ほくつと口から熱々の白い湯気を出してうっとりした顔を浮かべる。

「……ほんと最高……はあ……」

今日のために頑張ってセットした可愛らしい桃色の髪、男性の目を惹きつけてやまない豊かな笑顔、そして、毎日の畑仕事のおかげで引き締まった体も美しさを放っており、食事をするマリーベルの美しい姿に周りの男性たちも心を奪われ

ていた。

多くの男性がマリーベルに見惚れ佇む中、夜遊び人で有名な子爵令息がマリーベルに目を付けた。自身の股間が猛るのを感じ、パートナーになった女性を差し置いてマリーベルをダンスに誘おうとテーブルへ向かう。

——悪くないじゃないか。純粹無垢そうな女だし、俺の容姿と色気でコロツと落ちるだろう。ダンスの後にはベッドで美味しく頂いてやる。

子爵令息はニタリと悪い笑みを浮かべ、マリーベルがいるテーブルに手を付くと、焦がするような熱い視線を向け、色気たっぷりに髪をたくし上げる。

「俺と一曲踊った後、極上の夜を過ごさないか？」

大胆でかつ女に手を出す速さに周りは度肝う抜かれたが、マリーベルは子爵令息のことなど全く意に介せず、パンを千切ってチーズをたっぷり付けて頬張る。

「はあ、うまっ……」

「……………!?!?!」

——目の前に立っているのに、俺に気づいていない?! イケメンの俺よりパンの方に興味があるのか?! 俺は千切れたパン以下……………なのか……。

子爵令息のプライドは脆くも砕け散り、その場で膝をついて一瞬で灰になった。マリーベルはそんなことなどいざ知らず、また食事に耽り続ける。

カートレット家は王国のはずれに広大な果樹園を持つ男爵家であり、周りに山々が聳え立つ自然豊かな場所に家があった。マリーベルは物心がついた頃から家の手伝いをし、手伝いが終われば果樹園で採れた果物を手に抱えて山まで行き、木漏れ日が差し込む新緑の中で動物たちと一緒に果物を食べる日々を送っていた。

マリーベルにとって食べることは至高の幸せであり、週三で家にやって来る家庭教師の講義中も三時のおやつと夕飯のことで頭が一杯で、涎を垂らして講義を聞いてしまうほど食べることに支配されていた。

両親はそんなマリーベルを外で元気に遊び、よく食べる家族想いの自慢の娘と  
思っていたが、成人を迎え色恋の一つもないマリーベルの将来を心配していた。  
縁談を申し込もうとしても伝手がない。何とかして嫁の貰い手を見つけようと  
画策していたところ、昔からの付き合いがあるアウグスブルグ公爵家からパーテ  
ィーの招待状を受け取った。アウグスブルグ公爵家のパーティーは参加した者た  
ちのマッチング率が高く、そこからの成婚率も高い。

——これなら自分の娘も素敵な相手を見つけられるかもしれない。

両親は安堵し、マリーベルもまた自分宛ての招待状を見て目を輝かせた。

自分も華やかで煌びやかな大人の世界に足を踏み入れることができる。

マリーベルは生まれてこの方、住んでいる場所がド田舎過ぎて近くに歳の近い  
相手がいなかったただけで人並みに恋をしようと思っていた。物語で読む社交界は  
心ときめく夢の場所であり、その場に招待されたとなれば当然胸は高鳴る。

——ついに、自分も素敵な男性と恋をして結婚を……。



そうと決まれば、マリールは招待を受けた日から出会う男性に失礼がないようにマナーやダンス、そして閨の勉強に身を入れ、両親も初めて家の手伝い以外に頑張るマリールを陰ながら見守って応援していた。

そして、パーティー当日。

華やかなパーティー会場に一歩足を踏み入れると、ふかふかの絨毯に、豪華な装飾に、煌めくシャンデリアがマリールを出迎えた。

物語で読んだ通り、初めての社交場は全てが輝いて見えた。会場には身だしなみが整った清潔感のある貴族の令息たちが揃っており、これから夢の世界が始まる、そう思ったが――。

ふと、会場に自分の家の食卓には決して並ばない極上の料理が目に入った。

香ばしい料理の匂いが自身の鼻孔を擽ると、一瞬で頭の中は『ご飯食べたい』という想いで一杯になり、抗おうにも抗えない食欲が溢れてきてしまった。

パーティーが始まってから肝心の男性に話しかけられても話の内容は右から

左へ抜けていく。

——早く、料理が食べたい。

口から涎を垂らしてしまいそうになるのを堪えながら、家庭教師から仕込まれた必殺の笑顔で男性達をいなし、ゆっくりと料理に近づいていく。しかし、マリ―ベルの笑顔に惚れた男性達が行く手を阻み、囲まれてしまう。一向に料理に近づけない。もうどうしようもなくなつたマリ―ベルはスツと気配を消し、男性たちの視線を掻い潜り、こっそりと最高級の料理と対面した。

料理の前で目を輝かせ、手を震わせながら料理を一口頬張ると――。

「~~~~っ!!♡♡♡」

瞬く間に料理の虜になってしまい、男性のことが全く目に入らなくなつてしまったのだ。

両親はマリ―ベルがこのパーティーであわよくば素敵な男性と結ばれることを願っていたが、一つ誤算があつた。それは――マリ―ベルが何よりもご飯を食

べることが大好きだったということだ。

パーティーのダンスも中盤に差し掛かっていた。

会場も盛り上がりを見せている中、マリーベルは蕩け落ちてしまいそうな頬を抑え、ふと思った。

こんな美味しい物を自分だけ独占するなんて申し訳ない。今年のカートレット家の果樹園は台風と異常な高温により不作に陥ったせいで経営は悪化。

食卓に並ぶご飯は日に日に少なくなり、酷い時は野菜スープだけという日もあった。マリーベルの可愛い弟たちはへっちゃらな顔をしていたが、夜な夜なお腹を鳴らしていたのを知っていた。

だから、この料理を持って帰れば、弟たちも喜ぶに違いない！

弟たちにも美味しい物を食べさせてあげたいと、マリーベルは近くにいた物腰が柔らかそうなウェイターに「こちらを持ち帰りしたいのですが」と尋ねた。

通常のパーティーで料理のお持ち帰りはマナー違反であったが、今宵のパーティーではアウグスブルグ公爵家の提供した料理を存分に楽しんで貰いたいという当主の意向により許されていた。

とは言っても、お持ち帰りをすれば乞食貴族と揶揄され密かに家の格を落とされるのが常であり、持ち帰ろうとする貴族はマリーベル以外にいなかったのだが――、マリーベルにとってそんなことは些末なことだった。

この美味しい料理を家族みんなで共有したい、ただそれだけ。

ウェイターはマリーベルに向けて微笑んだ。

「ご自宅までのくらいかかりますか？」

「半日ほどです。弟たちにも食べさせたくて」

「分かりました。では、新しくお作りしたものを、保存魔法をかけた状態でお持ち致します。二日ほどでしたら、味を落とさず熱々のままお召し上がることが出来ますよ」

（えっ、新しく作ってくれるの？ しかも、お持ち帰りの料理に保存魔法をかけるの？　なんて贅沢なのかしら……）

王都の一部でしか保存魔法は使用されておらず、田舎で魔法をかけて料理を保存することなどありえない。畑で土まみれになり、新鮮な野菜や果物を丸かじりして過ごしていたマリーベルにとって、ご飯は温かいうちに食べるのが常識だ。だから、それは極上のサービスだった。

（やっぱり公爵家ともなればサービスが凄いのね）

「では、お願いします」

「かしこまりました」

ウェイターが一礼してその場を去る。

マリーベルはニコニコしながら、またデザートを頬張ると、んんっつと幸せそうな顔をする。

（このケーキも絶品っ！　クッキーにチョコレートを絡めて食べるともつと美味

しい！ これもお持ち帰りしようかしら！

マリーベルはまた、パクパクと美味しそうにデザートを平らげていくと、美味しさに目がハートになってしまう。

そして、公爵令息たちのダンスと同様にマリーベルの食べっぷりに見惚れている人も多く、奇しくも会場の注目は二分されていた。



パーティーが終わりに近づき、お腹が一杯になったマリーベルは一足先にパーティー会場を後にしていた。保存魔法が掛かった箱を嬉しそうにだき抱え、公爵邸の前で家路に向かう馬車を待つ。

頬を撫でるような優しい夜風が吹き、空は光輝く星々で彩られていた。

後ろを振り返れば、荘厳で大きな屋敷が目に入る。

(こんな屋敷に住めたら良いなあ……)

そんな想いに駆られたが、男爵家にいる限りそれは難しいだろう。

ふと、今宵のパーティーを振り返り、男性と甘い一時を過ごさずだったのに自分の衝動を抑えられず、突っ走ってしまったことに自己嫌悪に陥ったが――。  
(失敗は誰にでもある!! 次はきつと良い人と出会えるはず!! うん、次頑張ろう!)

マリールは食い意地だけでなく、切り替えの早さも一流だった。

時計を見ると馬車の時間まで少し時間があつた。もうこんな豪華な公爵邸を拝むことはないかもしれない。ふと、公爵邸の一部を見学することが許されていることを思い出し、記念に探索を試みることにした。

(うわぁ……綺麗……)

裏庭に回ると色とりどりの花が咲き誇る庭園が広がっており、中にはカートレット家の果樹園で見ることが出来る果物も実っていた。

その果物は両家の友好の証だった。マリーベルがまだ幼い頃、公爵家がカートレット家の作る果物を優先的に買い取ることが決まり、お近づきの印として公爵家が気に入っていた果物の種をプレゼントしたのだ。

パーティーが始まる前、マリーベルは日々の感謝を伝えるために家を代表して当主にご挨拶に伺った。当主はにっこりと微笑み、「カートレット家には恩がある。何かあれば助けるつもりだ。いつもありがとう。今日は存分に楽しんで欲しい」とマリーベルに告げた。

マリーベルは手伝いをしてただけで、家同士の詳しい馴れ初めは知らなかったが、家のことを心配してくれる強い後ろ盾があると安心するものだなとしみじみと思った。

探索を続けていると庭園の奥で一際目立つ白の花弁を持つ花に目を奪われた。花壇一面に咲きほこり、月の光も相まってとても幻想的で、庭園の中でも落ち着いた雰囲気漂っている。その花の中で淡く緑がかった花弁の付け根から透明な



花蜜が下にある大きな瓶にぽつりと滴り落ちるのが見えた。

近寄ってしゃがんで瓶を見つめていると、甘く脳を溶かすような匂いが鼻腔をつく。

「……美味しそう」

嗅いだことのない甘い匂い。口の中にどつと唾液が溢れてきて、どんな味がするのだろうかと一口だけでも舐めてみたくなってしまう。

ごくりとつばを飲み込み、喉を鳴らす。

（いけない、いけない。公爵家の物を勝手に取るなんて……あつてはならないことだわ。でも……凄くいい匂い）

抗えない匂いにマリールは瓶の近くに顔を寄せて鼻をすんすんとさせると、また口の中に唾液がじわりと溢れてくる。次第に頭の中がじんと麻痺してきて、恍惚した表情を浮かべ、口を開けてしまった。

——ぴちゃん。

「んっ!？」

花卉から瓶に落ちた花蜜が水面を跳ね、マリールベルはパクっと口の中に蜜を含んでしまった。まさに偶然、不可抗力。

これは仕方がないと思い、蜜を味見する。

じわりとマスカットのような甘く蕩ける蜜の味が口の中に広がっていき、喉の中を通り抜け、体に染みこんでいく。

「やっぱり、すごく甘くて美味しい。んんっ……？ ふあ、えっ、ちよつと……まっつ。なにこれ……、んあっ、あ……だめっ！ 体が……あつい」

蜜が通った器官全てが熱くなる。

急に体が火照り始め、体の奥底からじわあつと気持ち良さが溢れてきた。

「あっ……あう、んふっ……」

マリールベルはその場に蹲り、両手で体を抱えて昂り続ける気持ちを静めようと深呼吸をしたが、どうしようもない情欲が湧き水のように溢れ出てくる。

（熱い、体が熱い……。それに……。すごくしたい……）

「んう……。ふう、ふう……。あつ」

今までに感じたことのない情欲がマリーベルに自分の体を慰めるように促してくる。今すぐにもでも慰めないとどこかしくてどうしようもなく辛い。頬を赤く染め、息を荒げながらマリーベルは自分の秘部に触って致そうとしたが、ドレスを着ている状態で致すわけにもいかないし、流石のマリーベルも公爵邸の裏庭で致したら家の恥になると思っていた。

だが、体は言うことを聞かなかった。夜風が頬を撫でるだけで体を優しく弄られているような気分になり、ドレスが擦れるだけで硬くなった胸の蕾が過剰に反応して頭の中が真っ白になってしまう。既に自分の秘部から溢れた蜜がぐっしょりとパンツを濡らしてしまい、座り込んでいた灰色の石畳の通路を黒く湿らせていた。

今も太ももを伝って愛液が流れ出ている。

（こんな状態じゃ家に帰れない。どうしよう）

発熱したかのように頬が赤くなつて身動きがとれなくなつたマリーベルは助けを呼ぼうとしたが声が出なかつた。

（誰か、助けて……、このままだと……頭がどうにかなつてしまいそう！）

「なにしているの？」

頬を赤く染めたマリーベルの顔が上がると、眼鏡をかけた背の高い男性が立っていた。ドレスシャツと丈の長いフォーマルパンツ、サファイアのように青く透き通つた瞳に、眉までかかるしつとりとした紺青色の髪、そして、どこか儂く、クールな顔をしているのが印象的だった。

「大丈夫？」

男性がしゃがんで、ぐいっと顔を近づけてマリーベルの瞳を見据える。

蜜に似た香しい匂いに、男性にしてはプルツとした唇、鼻筋も高く、このパーティー会場で出会つた男性の中で最も美しかった。

マリーベルは、ただただ男性の美しさに見惚れてしまう。

「ごめん。聞かなくても分かった。庭園の奥には絶対に誰も入れないようにって言うておいたんだけどな。いや、それよりも媚薬の原液を飲むとか……君はなんて命知らずというか」

「美味しそうで……口を……あけていたら……瓶にはねたのが……くちの中に……ごめん……なさい」

「……そうだったのか。なら、君をこの場所に入れてしまった公爵家と花蜜の管理方法にも問題があったね。……申し訳ない」

「いえ……わたしが……いけないんです……んっ、う」

「君だけの責任じゃない。責任は公爵家も背負うべきだよ。……ちよつと失礼」  
男性はマリーベルの頬に手を当て、マリーベルの様子を診察する。だけど、触られただけ体中に電撃が走ったかのように痺れ、マリーベルの太腿ががくがくと痙攣した。既に体の力は抜けてしまっていて、男性にもたれ掛かってしまいう

になるのを必死に堪えた。

診察を終えた男性の視線がマリーベルの持っていた持ち帰りの箱に向かう。

マリーベルは自分がこんなに発情したとしても、弟たちに持って帰る料理は大事に持っていたのだ。

「パーティーで出された料理を持ち帰りにしてくれたんだ」

「おと……うとたち……に……食べ……させたくて……」

「家族想いなんだね」

「おいしいごはんを食べるのが……すきで……皆で……美味しくご飯を食べるのはもっとすきで……」

「ふふっ。なんだか君が食べている所を想像すると、こっちも楽しくなってご飯が美味しくなりそうだね」

ドキッとするようなあどけない笑みを向けられ、胸が高鳴ってまた体が熱くなる。

「そういえば、君の名前を聞いてなかった」

「マリー……ベル、カート……レット」

「マリーベル……カートレット?! えっ……、君が……?」

一瞬、目を見開いて驚いた男性は、マリーベルのことをじつくりと見つめる。

「……? ……どこかで?」

マリーベルは男性のことを思い出せなくてキョトンとした顔をしたが、男性は口元を緩めて微笑んだ。

「今は……余裕がないと思うから気にしないで。マリーベル……素敵な名前だね。君のことをマリーって呼んでもいいかな?」

男性が優しそうに見えるからか、柔らかな笑みに絆されたのか分からないが、そう呼ばれるのが嫌じゃなくて思わずこくりと頷いてしまった。

「僕はアウグスブルグ公爵家の三男で、媚薬の花蜜の研究をしていて、花蜜を使った媚薬のお菓子の販売をしているんだ。媚薬と言っても、濃度を薄めた花蜜を

お菓子に混ぜて、夜の営みを盛り上げたい夫婦が使う代物なのだけど」

「そうだったん……ですか」

「でも、原液は体に毒。このまま状態で放置すると、マリーは一生体が疼いて誰かを求めてしまう。だから、花蜜を体の外に出して体内に残った媚薬を分解しなければならぬ。それでその方法についてなのだけど……」

「はい……」

「男女の営みをして男性の精を女性の中で出さなければならぬ。媚薬の成分を打ち消す効果が男性の精液にあるんだ。原液を飲んだ場合はその方法しかない」

「……っ!!」

（じゃ、じゃあ……私がこの状況から脱するにはこれから誰かとエッチしないとダメってこと？ しかも中に……。と、とんでもないことになっちゃった。いや、待って。そもそも私には相手がない……じゃあ、私は一生発情して生きなきゃいけないってこと?!）



そんなことになれば、家族にも迷惑をかけてしまうし、もしかしたら見知らぬ男性を求めて彷徨い続けてしまうかもしれない。そんなの……嫌だ。

「んう……。はあ、はあ……う」

体がさつきよりも熱くなってきた。

媚薬が体に回って来たのか、熱い吐息が口から漏れ始めてきた。

（うう……。エッチなことしたい……）

でも、目の前にいるのは公爵家の令息様だ。

友好関係にある家柄とはいえ、これ以上の粗相はできない。

（でも……。体がすごく辛くて、切ないよ。本当だったら……。誰かに……）

息も絶え絶えの中――、男性がマリーベルの手を取り、片膝について一礼する。

「……？」

そして、マリーベルの手の甲にキスをした。

「……あ」

男性からの初めてのキスにボツと顔が火照る。

「今宵、僕と一夜を共にしてくれないか」

「——っ!？」

「そして、君を妻に迎えたい」

（ふええええええええ!? わたし……、エッチを通り越して求婚されちゃった?!）  
「み、見知らぬ人にいきなり求婚するなんて……おかしいです！ 何を考えているのですか！」

「……そうだね。確かに……おかしい。でも、このままマリーを放置して他の男性に取られたりでもしたら僕は一生後悔すると思うから。それにこれはマリーを救うためでもあるし、君の初めてを奪う責任でもある」

嘘偽りのない真っすぐな瞳。どうやら本気で言っているように見える。

だが、男性の真意が分からなくて戸惑ってしまう。

「ま、まさか……、今日のパーティーで相手が見つかったりした？」

マリーベルは首を横にふった。

「なら——、その相手を僕にして欲しい」

人生で男性にこんなに熱く求められたことはない。

並々ならぬ熱意に押され、心が揺らぐ。

もしかしたら——。

男性は公爵家の者として、パーティー参加者を発情させて抱くことになった責任を取るために自分と結婚をしようとしているのかもしれない。

確かに男性が言うように初夜を迎えるまでお互いが清い関係であるのが常ではあるが、例外はある。結婚に至る世の中のカップルの全てがそうではないのだ。

（真面目で誠実そうな人だし、妙な責任を感じて無理をしているのかも）

それならば——。

マリーベルは男性に嫌われるために精一杯の悪い笑みを浮かべた。

「本当にわたしで……良いんですか？　勝手に裏庭に侵入して花蜜を口にしち

やうマナーの欠片もない女ですよ？　一時の過ちで私と結婚したら、後悔するかもしれません」

ご飯一杯食べるし。欲望に素直で我儘だし。考えなしに行動するし。

男性もこんな自分を知ったら幻滅するに違いない。

「あなたが責任を負う……必要はありません。そうだ……、媚薬の効果を解くために娼館に連れて行ってください。そこで男娼に抱かれます」

そう、無理して結婚をする必要はないのだ。ここまで言われれば男性も諦めがつくだろう。早く王都の娼館に連れて行って欲しい。マリーベルは敏感になった体を少しでも鎮めるために深呼吸をしたが――、男性はマリーベルの頬に手を添え、柔らかな笑みを向けた。

途端にマリーベルの胸の鼓動は速くなってしまう。

「君と共に歩む覚悟できている男がそんなことをさせるわけがないだろ。僕はマリーが良いんだ。マリーじゃなきゃダメなんだ。僕は……君が欲しいんだ」

「……あ、」

そつと男性の唇が自分の唇に触れた。月光に照らされる中、柔らかな唇がゆつくりと離れる感覚も甘美に味わえるほど優しい口づけだった。唇が離れるとマリ―ベルは名残惜しそうに自身の唇に手を当て、男性をじつと見つめてしまう。

「大丈夫だから。僕を信じて」

自分の細やかな抵抗は男性の柔和な笑みと口づけで簡単に壊されてしまった。男性を見ているだけで胸の奥から熱く焦がれる想いが込み上げて来る。

そして、どうしようもなく自分の秘部がじゅく♡つと疼いた。

（この人のキス……優しくてすごく好き。この人……良い……かも）

こんなのただの直感だ。間違っているかもしれない。正式な結婚の手続きを踏んでいないから男性の言うことを全部鵜呑みにすることはできないし、抱かれた後に結婚を白紙に戻される可能性もある。

でも、たとえ一夜限りになったとしても、抱かれるなら自分のことを情熱的に

愛してくれる人が良いと思った。

「分かり……ました。お願い……します」

マリーベルはぽふっと男性の胸に体を預けた。

自分よりがっしりとした大きな胸元に支えられ、ホッとしてしまう。

「ありがとう」

男性はさつとマリーベルをお姫様抱っこして、公爵邸の中に連れ込むと男性の寝室に入った。

マリーベルは着ていたドレスを脱がされた後、コルセットを外されサテンスリップの姿になるとまた抱き抱えられて、ベッドの上に優しく寝かされた。男性もネクタイを取ると自身のシャツのボタンを外す。

マリーベルはふわふわの枕を頭にしながら、男性の透き通るような絹肌、細身なのに割れた腹筋、そして浮き出た鎖骨を見て、つつい見惚れてしまう。

「あ」

見惚れていたマリーベルはサテンスリップをゆっくりと捲られて、下着姿にされる。そんな手際の良い男性をポヤ〜っと見つめながら、これから起こることに猛烈な恥ずかしさを感じた。

（わたし……、初めてだけど……大丈夫かな）

突然の閨事に失礼のないようにしなくてはと、閨の勉強を懸命に思い出していたが媚薬が既に全身を巡り頭が回らなくなってきたており――、

「……わたし、がんば……ります」

ただそう答えるしかできなかった。

「マリーは頑張らなくても良いよ。気持ち良くなることだけに集中して」

男性は微笑し、マリーベルにそっと優しい口づけをした。

そして、羽毛で触れるかのような手つきでマリーベルの体に手を這わせ始める。触られるだけで、体がビクンッと跳ねてしまう。

「あっ……はあ……、んう、……ああ！」

「……可愛い」

耳元で囁かれる優しい音色をした声が心地よくてマリーベルは黙ったまま頬を赤らめる。

「……あ……っ、」

チュツと首元にキスをされた。そのまま甘いリップキスを繰り返されると、甘く痺れるような感覚が体を巡り続ける。

（キスをされているだけなのにすごく気持ちが良い……）

「はあ……あ……んっ、あ……んくう……んんあっ！」

首筋を舌で舐められると、頭の中が痺れ、あまりにも気持ち良さに意識が飛びそうになる。瞬く間に快楽の渦の中に放り込まれ、湧き出る情欲に抗えなく快楽を貪り続けてしまう。

唇を啄まれると、厚く柔らかい唇が重なり合った。

「マリーの唇、ぷにゅとしてて柔らかいね」



それはあなたの方じゃ……とマリーベルは思ったが、ただひたすらに男性とのキスに興じた。

齒列をなぞられ、舌を濃厚に絡め合うと、男性の舌から流れてくる唾液をこんこんと飲み干す。それはどんな果汁ジュースよりも甘美なもので、もっと欲しくて、自分から男性とのキスを欲した。

お互いを求めるキスはどんどんと熱く、激しいものとなっていく。

ぬちゅ、ぬちゅ♡……れろり、ねちより♡、ちゅぷ♡、ちゅぷん♡

二人の舌がねつとりと絡まり合い、舌が離れては唾液の橋を作る。気持ち良過ぎて止めることなんてできなかった。男性の唇が離れると、マリーベルは口が寂しくなりもっとして欲しいと眼で訴える。男性もそれに応じるように何度もマリーベルと口づけを交わした。

男性とのキスはこの料理よりを食べている時よりも幸せで、心が満たされていく。求めても求めても足りない。キスをするたびに情欲が溢れ出てくる。その情

欲を男性とのキスにぶつけ、まるで男性のことを食べてしまうかのようにキスに耽ってしまふ。

ふと、ファーストキスがこんな獣みたいで良いのだろうかと思ったが、そんな気持ちを打ち消すぐらい男性とのキスが好きだった。

「ぶは……あ……。キス……すごい」

「僕もこんなに長いキスをしたのは初めてだよ」

「わたしも……あなたと……のキスが……すごく、良くて……」

「ありがと。そう言ってくれると嬉しいよ。あとさ、僕のことにはライって呼んで。

あなたは味気ないし、もっとお互い気軽に呼び合おうよ」

「うん……、ライと……のキス好き……。もっとほしいな？」

マリールがふにゃとした笑顔に向けてそう言うと、ライは手の平をマリールに向けて顔を隠した。

「どう……したの……？」

「いや……。マリーが可愛いすぎてどうにかなくなってしまいそうになったんだ」

「また……かわいいって……言って……もらえた。うれしい」

頬を赤く染め、とろんとした顔で言うマリーベルの姿はライの心を猛烈に焦がした。ライはツンと反り返ったマリーベルの胸の蕾をくに♡、くに♡と指の腹で摩る。

「あ♡♡ ん♡♡」

「マリーのここ……、触るとどんどん硬くなるね」

「んう……。あ♡」

どうやらキスに耽っている間にブラを外されていたらしい。

ライは胸を優しく包むように揉みながら、蕾を刺激する。

「マリーのもっと可愛い顔が見たい」

あむり♡とぷくりと膨れ上がった蕾を口に含まれ、熱い吐息を含ませながらゆっくりと舐められる。

「んあ、あっ♡ いい……すごくいい！ んんっ……あっ♡」

ライが舌先で蕾の周りを撫でまわすように愛撫すると、マリールベルの体が跳ねた。もう片方の蕾も指の腹でくにくくにゅっ♡と上下に摩られる。

「んんっ！ きもちい……、あ、あっ♡ もっと舐めて……もっとして……んあっ♡」

通常の媚薬は感度を二倍ほど引き上げる。しかし、原液を飲んだマリールベルの感度は少なくともその数倍は上がる。その快感は想像を絶するものだ。

男性の前で可愛くあろうとする令嬢としてプライドなどどこかに吹き飛び、与えられる快楽にただ素直に溺れてしまう。

通常の愛撫では得られない快楽がマリールベルの体を巡り続け、蕾を丹念に舐められただけで視界がチカチカ点滅する。蕾への甘い舐めに合わせて、こりこりっ♡と刺激されると、マリールベルが頂へと登りつめるのはそう難しいことではなかった。

「ひゃあ！ あっ♡ ビリビリ……って、なにかきちやう♡ ああっ、きちやっ！♡ んっあ♡ だめ……、あっ、いっちやッ♡」

腰が痙攣して、頭の中が真っ白になる。

初めての乳首イキに戸惑いを隠せなかったが、ライはまだ乳首を丹念に舐め続けた。

「ライ……、わたし……いっちやったからあ♡ そんなにやさしく……なめられちゃったら♡ またあ……いっちやうよお♡」

マリーベルはうるうるした瞳でライに愛撫を止めるように懇願したが、ライはにこりと微笑むだけだった。ライは蕾を撫でまわすだけでなく、上下にちゆるんっ♡と愛撫すると、マリーベルはまた快楽の底に沈められていく。

「んんっ、あ……♡ すき♡ ライにちくびなめられるのすき♡ あっ、あ、あっん♡ またきちやう♡ また、わたしいっちやう♡ ライ、ライ……♡ あっ♡ んあ♡ ああっ♡ イグッ！♡」

今度は腰を弓なりに反らせて痙攣させ、マリーベルはまたいった。だが、快樂の渦の中からは抜け出せない。ライは宣言通り、その後もマリーベルの蕾を咲かせるようにそつと舐め続ける。

「もうだめえ♡ おかしくなるう♡ おかしくなっちゃう♡！ またあ、またあ♡ ……あああ♡ んん♡ んん♡ イ、グう♡」

れろ♡、れろ♡……じゅる♡、じゅる♡、ちゅぷ♡、ぢゅるる♡

「ひう!!♡ そんなにしちや……やあ♡ やだよ♡」

絶頂を迎え、硬く立ち上がった敏感な蕾に与えられる甘く強い刺激から逃れたくて、マリーベルは体をくねらせるが――。

「逃げちゃだめ」

ライに体を押さえられ、抗うことも逃げることもできない。

そして、また――。

「だからあ!♡ だめ、だめ、だめえええ♡♡♡ また……またあ♡ んき

ゆうう!!♡」

マリーベルは瞳にたつぷりと涙を浮かべ、肩で荒く息をしながら絶頂をその身に刻む。

「はあ……はあ……♡」

「マリー、もっと気持ち良くなって……じゅるる♡」

「あ♡ ああっ……♡ すごい♡ ぐう♡ きもちいの、止まらないの♡ ……」

…あああっ!♡♡♡」

左で三回、右で三回、合計六回イカされると、ライはやつと愛撫を止めてくれた。マリーベルの全身にはじんわりと汗が浮かんでいる。

（もう触れられただけでイっちゃいそう♡ ライにおっぱい舐められるの……気持ちよかった♡）

マリーベルは自身の指を咥えたまま放心状態になり、ライを見つめる。

「まだまだこれからだよ。この程度じゃ媚薬が体の中から抜けないから。いや、

正直な話、僕の方が終わらせたくなくなってしまったかな。喘ぐマリーが可愛すぎて」

「……うう♡ 可愛いなんて……」

「マリーは可愛いよ。僕の好みだ。もっと君を蕩けさせたら、可愛い顔が見れるのかな」

「~~~~っ♡♡♡ ……あっ♡」

ライはすすつとマリーベルのパンツに手を掛けると、マリーベルのお腹や脇腹に滴る汗をぺろりと舐めながら、器用にパンツを脱がしていく。

「やあ……♡ 汗、汚いよお……♡」

脱がされたパンツはマリーベルの片足に掛けられ、ライの舌が胸から秘部へっとうっつと這う。

「んんっ♡」

（汗かいているの……ぜんぶ舐められちゃってる♡）



体を這うライの舌はとてくすぐったかったが、そんな感覚も鋭敏な快楽へと変換されくちゆくちゆく♡と脇腹を舌で撫でられると、マリーベルは体をくねらせてしまう。

「あう♡ くちゆくちゆく……やあ……♡ お腹も……や……♡ んんう！♡」

お腹もとても敏感になっており、舌でねつとりと這われただけで軽くイってしまった。もはや、全身が性感帯だった。ライが触れれば、甘い快楽が全身に広がり、その快楽は止まることを知らない。

ふと、自分のお尻周りが非常に濡れていることに気づき、見れば秘部の近くのベッドシートには大きな水溜り模様が出来ており、自分から出た愛液で作ったと思うと、猛烈に恥ずかしくなった。

「う……、ごめん……なさい。シート、……よこして……っん♡」

「気にしないで。マリーが気持ち良くなってくれている証拠だし嬉しいよ」

「……むう」

ライの言葉にぐうの音もでないほど絆されてしまう。

「でも、もっと蕩けた顔が見たい。マリーの蕩けた声も、もっと聞きたい」

「あっん♡」

ライはむわっと熟されたマリーの陰核の周りに優しくキスを添えると、マリーの蜜で濡れた秘部を包むように愛撫していく。

じゅるる……ずじゅる♡……ずじゅるる♡

ちゅ♡……じゅるるる♡

「ひゃあ……♡ あっ、んんっ♡ つああ♡」

マリーベルは目を見開き、天井を見上げ、枕をギュッと掴む。マリーベルの蜜が余すことなくライに吸われている。ヒダから陰核へと徐々に焦らすように愛撫が移っていき、ぷくりと赤く膨れた陰核を柔らかな舌の腹元で優しく触れた。

「はあっ♡ んう♡ あふっ……んんあ！♡」

ライの顔が上下に動き始め同じテンポで与え続けられる優しい愛撫に、マリー

ベルは蕩け切ってしまう。

(クリ好き♡ 優しく舐められるの好き♡ もっと、もっとして欲しい♡)

ライの愛撫は極上だった。自分の蜜口からとめどなく蜜が流れ出すのを抑えることもできず、どうしようもなく、ぐしょぐしょになった自分の秘部を気にする余裕もなく、ただひたすらに快楽に溺れることしかできない。

「あぁ♡♡ ひゃう♡♡ んんっ！♡」

このまま快楽の波に溺れそうになって怖くなったが、ライが手をぎゅつと握ってくれた。それはずっと隣にいるよと言われているようでとても安心できた。

くちゅ♡、くちゅ♡、じゅるるる♡

ライの愛撫から与えられる快楽に全身で浸ると――。

「んんっ、わたし……また気持ちいいのきちゃぐ♡ あっ♡ んんっ♡ イグっ

……イグウッ！♡」

マリ―ベルは体の奥に溜まっていた快楽がパンツと弾け、体を震わせていった。

頭の中が真っ白になり、力が入らない。ライは止めることなくマリーベルの可愛  
いさえずりを聞きながら、滑らかな指をゆっくりと蜜壺の中に入れると――。

「あッ♡ 指が……、またいつちやぶっ♡ んんぐう!!♡ はあ……あっ♡ あ  
あ……♡、はあはあ……♡」

（ゆびが……はいった……だけなのに……♡ わたし、イっちゃった♡）

そして、マリーベルはライに陰核を舐められながら、太い指で膣上を優しく摩  
られ、くんっ♡と押された。

「ああ、あっ♡」

膣裏から陰核にむけてぐっ、ぐっと指で摩られ続ける。厭らしい水の音が鳴り  
始めると、指が二本になり、指の刺激が振動のように変わっていく。

「あ♡ あっ♡ あああっっ！♡」

内と外の両方から責められ、蜜口から水の音が鳴り響き、マリーベルはただた  
だ幸せの中にいた。

「ぐん♡ あっ♡ ぐあッ♡ だめ、だめだめっ♡ またいっちゃうッ!!♡♡♡」  
マリーベルは踵をピンとあげて、ぷしゃ♡っと幸せの愛液をライにぶっかけてイってしまった。

（潮なんて吹いたことなかったのに♡）

ライによって自分の体がどんどんと開発されていく。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

また、膣内から指で甘い刺激を加え続けられる。

「ああ！ また出ちゃう♡ 出ちゃう！♡ あっ♡ んんっ♡」

マリーベルはまた潮を吹いてしまいそうになり、懸命に唇を噛み締めて堪える。

「恥ずかしがらないで。媚薬を抜くのに必要なことだから」

「で、も……♡ あっ♡ はあ♡ ああっ♡」

「もう一回、クリを舐められるのが良いのかな……ちゅ♡」

ライに陰核を舐められ、すぐさま抗えない快樂がやって来る。

——もう無理っ！

「やあ！♡ だめえ♡ ひうっ♡！ あ、ああっ、あああ~~~~っ！♡♡♡」

二度目の潮吹きにマリーベルは頭の中が真っ白になる。

マリーベルは荒い呼吸をしながら、ライが顔についた愛液を手で拭ってペロリと舐めるのを見た。

「マリーの……甘くて美味しかったよ。んっ。少し媚薬が混じっているかな？」

「~~~~っ♡♡♡」

自分の蜜の味を知らされ、恥ずかしさで顔を枕で隠したかったが、体を動かす事が出来ずそっと顔を逸らした。

「じゃあ、そろそろ本番に行くね」

ライはズボンを降ろすと、細身の筋肉質な体には不釣り合いな血管が浮き出た赤黒い巨大な男根を曝け出す。

（うわぁ……すごい立派♡）